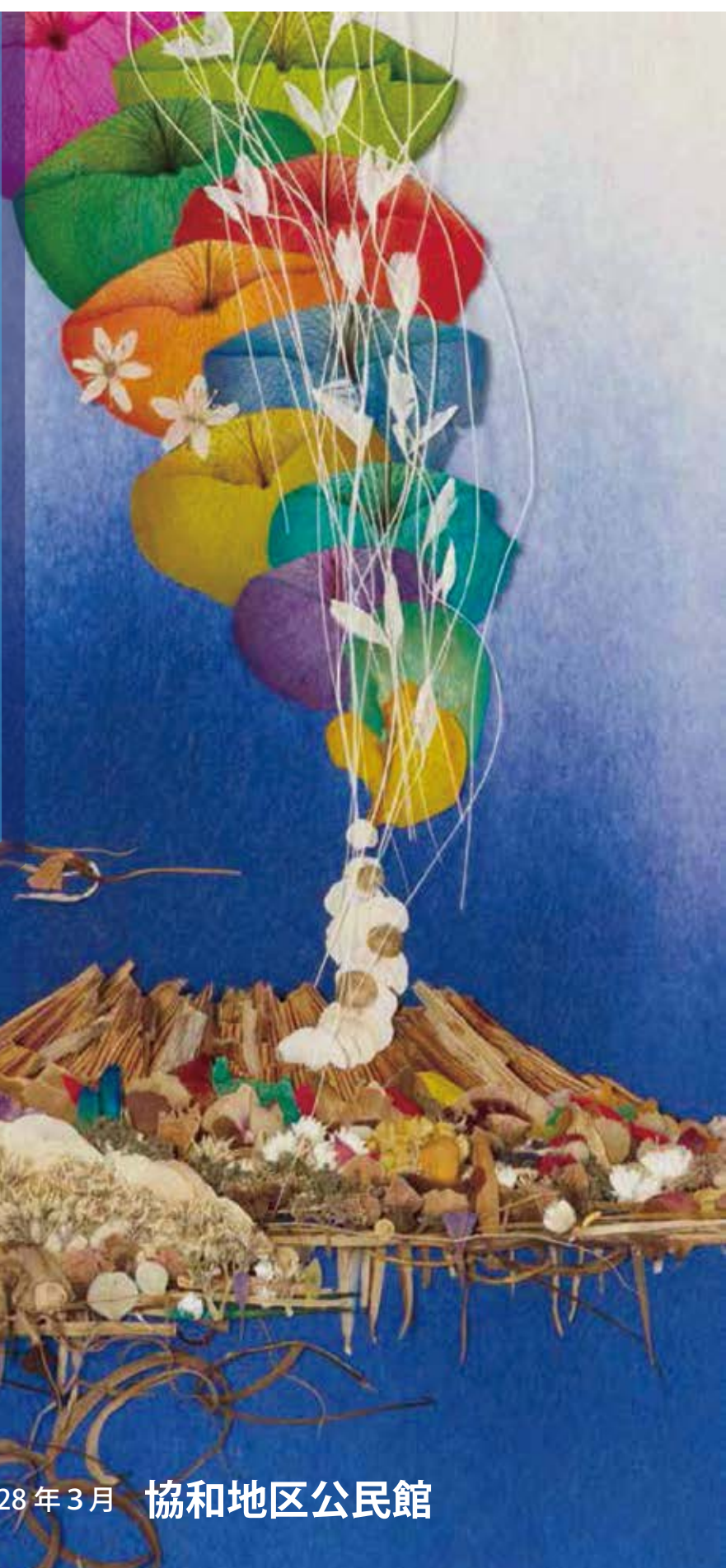


協和のあゆみ

私たちのふるさと



平成 28 年 3 月 協和地区公民館

目次

1. 協和の歴史 1
2. 桜島の大爆発 2
3. 漁業 3
4. 農業 5
5. 海湯温泉 6



- 6. 教 育 7
- 7. 郷土芸能・郷土料理 9
- 8. 協和地区の伝説、むかし話 9
- 9. 協和の今後 10
- 10. 協和の史跡や文化財マップ 11

◎表紙ペタルアート／ミヤギタケオ「海潟心象」 ◎表紙題字 福島智子



(海潟造船所跡付近：昭和 23 年 (1948) 10 月 7 日 米軍による撮影を加工)

1. 協和の歴史

協和地区は錦江湾岸の海潟と中俣の2つの大字の地域で構成され、協和小学校の校歌にも「みどりにはえる江ノ島のながめさやかに青い海」とあるように、^{ふうこうめいび}風光明媚な土地です。

また、北は桜島口の戸柱神社から南は荒崎パ^{とばしら}ーキングまでの国道220号線沿いに約6キロメートルにわたり集落の家並みが続いています。協和地区に人々が住みついたのは一番古い資料としては、協和小学校校庭東北隅から縄文式土器及び遺跡が発見され、同時に打製石器類や土師器、須恵器、^{あらさき}獣骨なども発見されています。このことから数千年前からここに人々の生活が営まれていたことがうかがえます。



昔から海潟の崎山集落の山手では「貝の化石」が掘り出されていましたが、国鉄大隅線の建設に伴って今では発掘するのが出来なくなっています。ここは海底が隆起して陸地となり、当時生息していた貝がそのまま化石となったもので、一説に海潟の名はこの貝形から出たものと言われています。



貝の化石

垂水の名が歴史の記録に現れるのは保安元年（1120）、宇佐八幡宮から藤原上総介舜清が元垂水の荒崎城に来てからのことです。

寿永4年（1185）、壇ノ浦の戦いで源氏に敗れた平家の落人は九州各地に逃れていきますが、中俣の浦谷集落は落人の里の言い伝えや、落人の墓が残されています。



石井氏の墓

その後、この協和の地域は12世紀末に中俣氏、14世紀末に石井氏に支配されますが、海潟、中俣もあわせて垂水の名称を冠せられるようになったのは伊地知氏等が支配してからです。（天文5年【1536】、8代伊地知重武が下大隅垂水を治める）なお、海潟の菅原神社は学問の神様、菅原道真を祀ってありますが、伊地知氏によって建てられたという説もあります。

伊地知氏は垂水を治めること第9代重興（1528～1580）に至って全盛期を迎えました。伊地知氏は勢力を大隅に伸ばしつつあった島津氏との戦いに対して、大隅の豪族、祢寝氏や肝付氏と提携し対抗し、早崎城や入船城（牛根城）において戦いましたが、ついに天正2年（1574）田上、高城、新城等5か所を差し出し降伏しました。



島津墓地

その後、藩政時代に入り、慶長4年（1598）垂水島津家初代・忠将の所領となつてから明治2年（1869）まで協和の地も垂水島津家15代、約270年にわたる支配が続きました。

2. 桜島の大爆発

錦江湾にそびえる桜島は、有史以前から大きな爆発を起こし、そのたびに噴出する熔岩や火山灰は周辺の人々に多大な被害を及ぼしてきました。

特に桜島の近くに位置する協和地区は桜島の活動と密接に結びついています。そのうち、大爆発の大きなものは安永8年（1779）と、大正3年（1914）1月12日の大爆発が特筆されます。

安永の大爆発については約60年後に垂水島津家の家臣、伊地知季虔が著した「桜島燃き」に海淵周辺、特に小浜集落の被害の様子や復旧に向かう人々の奮闘の様子が記されています。さらに、噴火などで亡くなった人々の霊を弔って建てられた石碑「櫻島焼亡塔」がいまも菅原神社の境内に残されています。



桜島噴火

大正の大噴火の大量の熔岩流により桜島と大隅半島とは現在の桜島口で地続きになりました。当時の噴火前後のことは、様々な記録や写真が残されており、噴火当時のすさまじさをいまに感じさせてくれます。

この時、桜島にあった瀬戸村や脇村などの人々を救い出すために落下

してくる噴石や降灰をかいくぐり、軽石の海へ決死の覚悟で船をこぎ出し、桜島島民の救助に向かった和田岷太郎、川畑岷太郎、坪内八次郎、柏木万吉など協和の先人たちの奮闘も忘れてはなりません。

桜島は今も活発に活動を続けており、火山灰の多くが北西風に乗って、時にはドカ灰となって降り注ぎ、私たちの生活や農作物などに大きな影響を及ぼしています。しかし、今後も私たちは桜島とともに生きてゆかねばなりません。



降灰の積もったビワの葉

3. 漁業

藩政時代から協和地区には海潟と中俣の漁村（浦）に役人が住む浦屋敷があり、一本釣りや地引網漁業など小規模の漁業が営まれていました。海潟の小浜の山の上には魚見（いおん）の場所があり、シビヤソウダガツオ（協和地区ではめっか）の群を見つけると浜に大声で伝え、浜からは何隻も船を沖に漕ぎ出して網で囲い込む漁業法もありました。しかし、大正3年（1914）の桜島噴火による瀬戸海峡の閉塞は潮流が変わり、シビなどが回遊しなくなってしまいました。

明治以降は定置網漁業や八田網漁業（正しくは、焚入八田網漁業）もさかんになりました。八田網漁業は夜間に火を焚いて魚を集めて取る漁法です。集魚の火は初めは松の根を焚いていましたが、後にはカーバイト灯やバッテリー灯に変わりました。明治31年（1898）、



生簀籠の輸送

政府が遠洋かつお漁業奨励法を施行したことに伴い、明治39年（1906）、鹿児島県水産技手・島田覚治（垂水田神出身）の指導により、カタクチイワシがカツオの餌に適しているため、海潟で生簀が試験的に実行されました。生簀は孟宗竹で編んだ約3メートル四方の生簀籠が用いられ、獲ってきたカタクチイワシは遠洋漁業の船が買い付けにやってきました。

カタクチイワシが豊富にとれる協和地区の漁業は枕崎や山川などのカツオ漁業と密接につながり、明治45年（1912）揖宿郡喜入の前之

そのすけじろう

園助次郎や枕崎の鮫島喜成の両名が移住してからは、海潟の生簀漁業は
いっそう規模拡大を遂げました。そして、大正時代に入ると、遠洋カツ
オ漁業に製氷の利用法や無線電信の技術が導入されるとともに、八田網
漁業も急速に発展しました。

この頃、漁業振興に力を尽くした先人には岩元浅吉、宮城権太郎、和
田源市らの名前が挙げられます。太平洋戦争の激しくなる前まで海潟は
空前の活況を呈し、カタクチイワシを買い付けたカツオ漁船の乗組員た
ちは海潟温泉街に繰り出し、海潟の町は大変活気に満ちていました。

戦前戦後にかけて漁業者の組織づくりが進められていましたが、漁業
近代化に尽力したのが深見休作ふかみきゆうさくです。昭和24年（1949）2月1日
垂水漁業協同組合が発足し、初代組合長に就任しました。

真珠養殖や煮干加工業、のり養殖も試みられたこともありますが、カ
タクチイワシの漁獲高が次第に減退したため、
取る漁業から育てる漁業へ、昭和37年（1963）にはハマチ養殖事業への転換が始まり、
40年代にはいつてからは海潟のハマチ養殖漁
業は黄金時代を迎えるのです。



カンパチ餌やり体験

その後、養殖事業はハマチからカンパチへと
移行し、現在では垂水市漁協はカンパチの生産量では単一漁協として
日本一を誇っています。

平成16年（2004）7月、カンパチ”海の桜勘”は、鹿児島島の魚
ブランドとして認定を受けました。また平成21年（2009）に始ま
った、カンパチ祭りは年を追うごとに盛んとなり、
県内外から多くの人々が海潟を訪れています。

さらに最近では修学旅行の民泊と組み合わせたカンパチの餌やり体験事業も行われ、漁業を
通して海と人との関わりを学ぶ体験事業が展開
されています。また、平成14年（2001）



には、高倉健主演の映画「ホテル」が海潟漁港を舞台にクランクインし、
地元の方々もエキストラとして協力し、話題を呼びました。

4. 農 業

垂水は前に錦江湾、後ろに高隈山が迫って耕地が少なく、農業を営むには条件の悪い土地ながら、このことを逆手にとって協和の先人たちは努力や辛抱を重ねて農業に従事してきました。

協和地区では米はもちろん、甘藷^{かんしょ}、煙草^{たばこ}、サトウキビ、蜜柑^{みかん}、びわなど水利や地質、地形に合わせて先進的な農業が営まれてきました。

キヌサヤエンドウは今や誰も知らない人はいませんが、昭和の初期に中俣^{すえ た あさいち}において導入したのが末田浅一でした。キヌサヤエンドウを蜜柑の間作として農家に勧め、戦前戦後にかけて、垂水をキヌサヤエンドウの一大生産地としての基礎を築き上げました。末田浅一の功績を後世に伝えるために本城橋の南側に顕彰碑が建てられています。



キヌサヤエンドウ

畜産については明治のころまで牛馬は主に農作業用として利用されていました。大正期に入ると、農家の副業として、またその糞尿を堆肥源として牛、豚、鶏の飼育が奨励されますが、協和地区もその例外ではありませんでした。

肥育牛については大正の始め、1910年代に中俣^{さいはらきん じろう}の才原金次郎は自家飼育はもちろん、農家に対して子牛を預け、成牛に育てたのち買い取るという肥育牛模合制度^{もあいせいど}を設け、農家の現金収入の道を開いたのです。その後牛の頭数は急激に増加していきました。才原金次郎^{けんしろうひ}の顕彰碑は地元の脇田一集落の南側の国道沿いに建立されています。

現在、垂水市のキヌサヤエンドウ^{いちよく}、インゲン豆は日本一の出荷量を誇り、協和地区の農業はその一翼を担っています。桜島の降灰被害はあるものの、これからもキヌサヤエンドウ、インゲン豆、ビワなどの基幹作物はもちろん、ビニールハウスによるキュウリ、トマト、さらに玉ねぎやニンニクなども協和地区の特産品となるように努力を積み重ねていく必要があります。協和地区では農業の後継者不足をどうするかも大きな課題です。さらに地区内には耕作放棄地も目立ってきており、年々減少している自給率の低下も懸念されていることから、家庭菜園で野菜などを栽培するなど身近かな取り組みも必要です。

5. 海潟温泉

海潟地区では江戸時代の終わりころに垂水島津氏が、また明治の初めには公費を使って温泉掘削を試みましたが、いずれも失敗に終わったと伝えられています。しかし、飛岡の海岸に一か所、自然に温泉が湧き出していました。

昭和初期までこの温泉井戸から温泉水をくみ上げて、沸かして利用していましたが、うちだかたろう内田鹿太郎は昭和2年（1927）5月に温泉のボーリングに成功しました。これが海潟温泉郷の始まりでした。

続く昭和4年（1929）には上之原熊太郎が、昭和5年（1930）に井之上助右衛門、昭和7年（1932）に野嶋長四郎のじまちょうしろうと川畑銀蔵かわばたぎんぞうが温泉掘削に成功してから、海潟は一躍、温泉郷として鹿児島市を始め、近郷近在からの温泉客でにぎわうようになりました。通りには旅館、飲食店などが軒を並べ、鹿児島市と海潟を直接結ぶ垂水丸の航路もあったことを思うと当時の繁栄ぶりがうかがえます。

短期間に海潟温泉が発展を遂げた理由は、川畑銀蔵をはじめ中央地区本町の人々による積極的な新聞報道や観光案内の発行など、一大キャンペーンが大きく功を奏したからに外なりません。



絵ハガキ <<海潟温泉 江洋館>>

海潟地区は大隅半島唯一の温泉郷であると同時に、眼前に江之島や桜島を望む風光明媚な土地柄から、昭和20年頃の1940年代に入ると海水浴場、キャンプ村としても大きく発展しました。

昭和39年（1964）この地にあった協和小学校、同中学校が移転したあとに宿泊施設の「なぎさ荘」が建設され、しばらくはこの地を訪れる人々も多くありましたが、長引く桜島降灰の影響や環境変化などによって、海水浴場やキャンプ場は閉鎖されて現在に至っています。

また海潟温泉も昔のにぎわいを失っていますが、風光明媚な自然を生かして、海潟地区の再生に向けて立ち上がった若者グループ「海潟温泉再生会」の今後の活躍が注目されます。

6. 教育

明治11年(1878)1月20日、中俣と海潟の両学舎を合併し、協和小学が設立されました。校地は海潟1番地(現在の上之原温泉の敷地)でした。明治20年(1887)に、小学校令改正により協和簡易科小学校と改称、さらに明治26年(1893)協和尋常小学校と改称されました。明治40年(1907)～明治42年(1909)に先生をされた東キワさん、海江田トエさんの話によると『男の先生は洋服、女子職員は和服に海老茶の袴、草履をはいていました。校舎は板壁で、窓は障子。40人～60人学級で男女別々に勉強。科目は読み方、書、綴り方、算術、体操、唱歌、修身、裁縫等。教科書は兄さんや姉さんの使ったものや古い本をもらって勉強。修学旅行は福山まで歩いて一晩泊まり。運動会は11月の1日か3日でずいぶん盛大だった。子どもは遊びも登下校もはだし。言葉は昔から乱暴で、父親のことを「じよ、わ



昭和28年(1953)頃の協和小、中学校

やー」と言っていた。』とあります。垂水市史によると、大正元年(1912)には13学級、男女合わせて600名が学んでいました。大正2年(1913)6月には天神下に校舎が移転し、大正10年(1921)校名が協和尋常高等小学校と変更されました。同じ年に協和小学校に勤務された前之園ひもさんによると『協和小学校はスポーツが盛んで、徒歩やリレーは県下でも抜群。選手たちが協和校の負けじ魂を発揮して、何本も優勝旗を頂いて校長室に飾ってありました』と語っておられます。篠原和江さんは大正15年(1926)に協和小学校に入学されたのですが『着



昭和38年(1963)頃の協和中学校

すませて帰る人が多かった』そうです。時代も昭和に入り昭和9年（1934）、児童の学力向上や予算軽減などの理由から、垂水町議会では協和・柘原・水之上の3小学校の高等科を垂水小学校に統合することを議決したところ、協和校区民は反対して児童を垂水小学校に登校させず、私設の高等科を独自に設置して授業を開始したので県下の大問題となったのでした。昭和11年（1936）、結局は町当局が折れて、協和私設高等科を垂水小学校の分教場と認めて解決しましたが、地区民の子弟教育の関心の高さがうかがわれる事件でした。昭和16年（1941）協和国民学校と改称し、12月8日には太平洋戦争が始まると学校もだんだんと戦時色を強めて行きました。野嶋福造さんは『男子は丸坊主で半ズボン、ポケットは寒くても手を入れないように縫い付けてあった。体操の時間は軍事教練に変わり、男子は木剣、女子は薙刀の訓練となり、登校など隊列を作って登校した。校門の左側に奉安殿があり天長節などの時は校長先生がモーニングに白手袋で御真影（天皇の写真）を頭上に捧げ』ていたことを記憶しておられます。戦後、昭和22年（1947）協和小学校と改称されるとともに、垂水中学校協和教場が併設されました。昭和24年（1949）4月、海潟造船所跡の木材を移転して中学校の校舎とし、協和中学校が独立したのです。昭和38年（1963）7月12日、3年生以上は海潟865番地の新校舎へ移転し、翌昭和39年（1964）3月、協和中学校と同時に小学校の全児童が新校舎へ移転を完了し、5月14日には小学校・中学校の盛大な落成式が行われました。そして昭和53年（1978）1月には小学校は創立100周年記念式典を挙行了のでした。児童・生徒数は小学校が昭和34年の時、992名、中学校が昭和29年の時503名をピークに年々減少を続けています。

様々な環境の変化や桜島降灰の影響などから協和地区の人口は減少を続けており、



協和小学校正門



中学校閉校記念碑

平成27年（2015）9月末現在本市の人口は16,071人（男：7,477人、女：8,596人）です。うち、協和地区の人口は1,834人（男：865人、女：969人）です。また、少子高齢化も進み、小・中学生のいない集落も目立って来ています。

このような状況下、協和中学校は平成22年度（2010年度）をもって市内の4中学校とともに統合され、63年の歴史に幕を閉じました。

一方、協和小学校には51人の児童が在籍「平成27年（2015）4月1日現在」し、元気に勉学に励んでいます。平成24年度（2012年度）には協和小学校が特に学校防災において、学校の立地環境や過去の火山被害の状況を把握し、高い危機意識を持って児童の安全確保に努めていることが高く評価され、県の教育委員会から表彰されました。

7. 郷土芸能・郷土料理

以前、海潟地区には大太鼓踊り^{うでこおどり}や疱瘡踊り^{ほそおど}がありましたが、今ではほとんど知る人がなくなっています。又、中俣地区には川踊り^{かわおど}（中俣上）がありますが、現在は休止状態にあります。協和地区公民館では郷土芸能の残されている地域への視察や、地元の経験者から話を聞くなど、復活・活性化に向けて取り組んでいます。

また川踊り（下）については公民館講座の一つに据えて、会員の確保とともに、協和小学校生徒への指導と併せた後継者の育成と存続に努力しています。

また“ろっぺ餅”^{ろっぺもち}はもち米にサツマイモ、ふかした蓬の葉などを搗き入れた皮で黒砂糖のあんこを包んだもので、協和地区に伝わる郷土の食物です。

いま、その素朴な味を伝えようと、地区では新たな動きが始まっています。



太鼓（うでこ）踊りの道具



川踊り（下）



ろっぺ餅

8. 協和地区の伝説、むかし話

垂水のむかし話などをまとめた「垂城奇話」^{すいじょうきわ}【天保8年（1837）伊集院^{いじゅういん}

かねやす

兼愷著】のなかには協和地区にまつわる話があります。

例えば人買い・鱧九郎にさらわれた娘たちを助けた江ノ島弁天様べんてんさまの話、脇登集落ふかくろうと小浜集落の間にある聖崎しょうがきはなの沖で夜に三味線しやみせんやお囃子はやしが聞こえるという不思議な話、脇田の大富豪・オーベ酒屋の話、中俣川いわや かんのんの岩屋観音のかくされた財宝の話、海潟の音八という男と猫の話など、面白い話がふんだんに残っているのです。



江ノ島弁財天の看板

これらの協和の伝説や物語をもっと大人や子どもたちが知り後世に伝えていく伝承活動や地域での親子読書活動等に活用する取り組みも大切です。

9. 協和の今後

海潟地区と中俣地区は大きく言えば、それぞれ漁業、農業を中心にして、両地区民がお互いに切磋琢磨せつさたくましながら発展してきた地域です。現在、降灰による農業不振や長引く魚価の低迷など、苦境に立たされている一方で、平成21年に始まった海潟地区のカンパチ祭は回を重ねるごとににぎわいを見せており、カンパチ祭を核として協和地区の振興しんこうを目指す取り組みも模索もさくされています。



カンパチ祭り

協和地区の振興に向けては、旧なぎさ荘跡地の整備は避けて通れない課題として残っていますが、海潟温泉じく おうねんを軸に往年の海潟地区のにぎわいを再生させようと、「海潟温泉再生会かいがたおんせんさいせいかい」も発足し、温泉を活用した観光商品や物産商品の加工・販売、また温泉ソムリエの認定等に挑戦しています。

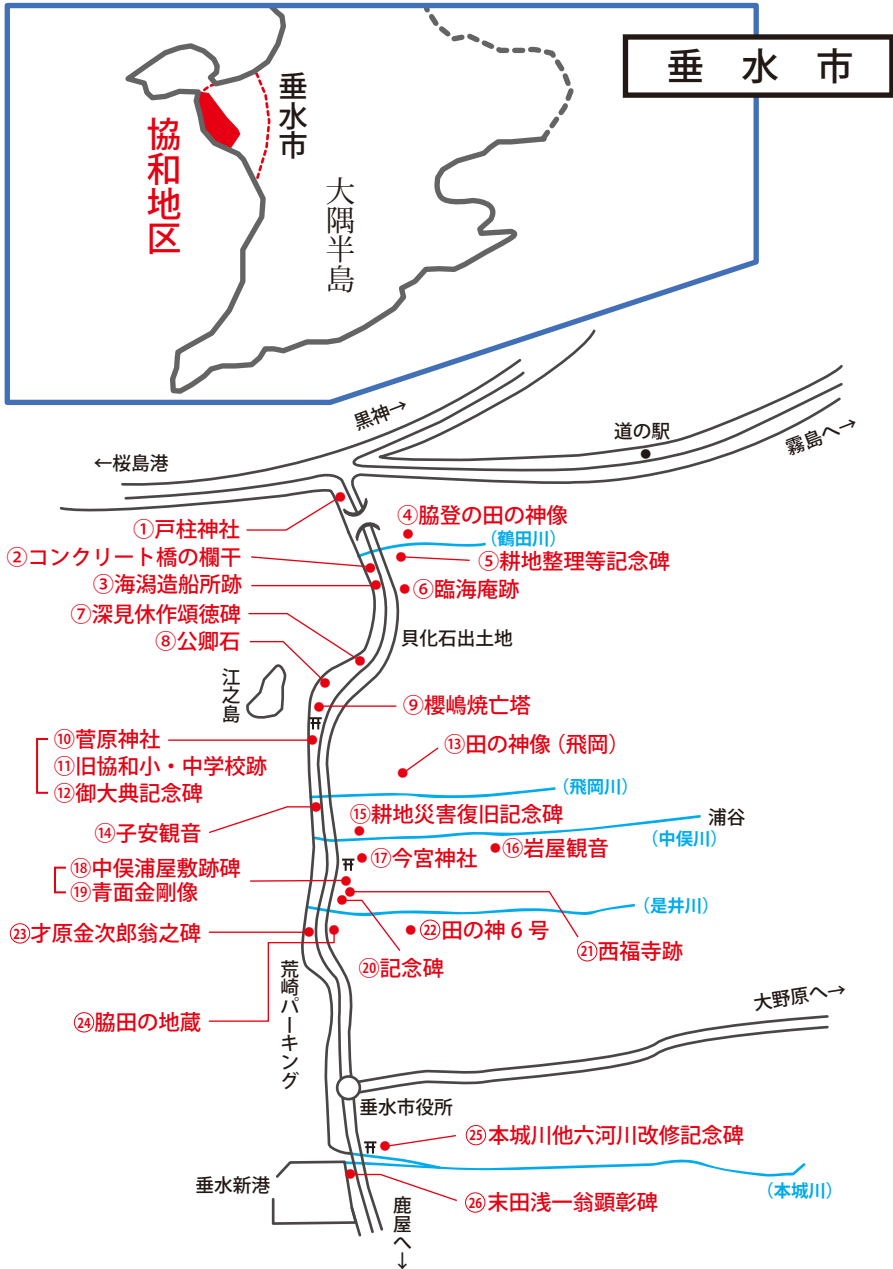
中でもきつい灰とりを競技化した「スポ灰ふっしょく」はまさに逆境の時こそその発想の転換として、桜島降灰のマイナスイメージの払拭につながる要素を持っています。「海潟温泉再生会」の今後の活動に期待が寄せられています。

協和地区は農林水産業、観光、温泉、歴史、文化など地域資源が豊富で、且つバラエティーに富んでいることに自信と誇りを持って、私たちの知恵と力をあわせて「協力和合」の「新しい協和」を作って行かねばなりません。



スポ灰

10. 協和の史跡や文化財マップ



とばしらじん じゃ

①戸柱神社

航海安全・大漁の神様である戸柱神社は海潟地区最北の桜島口にあります。もと桜島の瀬戸海峡に面した戸柱鼻にありました。大正噴火の熔岩が流れ出てわずかに埋め残してありましたが、平成7年（1995）3月、早崎大橋完成に伴い、現在地に再建されました。



②橋の欄干

昭和18年（1943）5月、付近に海潟造船所が作られた際、鶴田川の河道を約100メートル北側へ移したコンクリートの橋の名残り。脇登の旧道に残されています。

【川崎正一氏宅の西側】



③海潟造船所跡

太平洋戦争中、脇登・迫田地区に昭和18年（1943）7月23日、

「海潟造船株式会社」

が設立されました。木造機帆船「第二十一郵船丸」などが建造され、海軍の徴用船として活動しました。造船



所では従業員約2千名が働いていましたが、終戦後、枕崎台風や桜島昭和噴火などの被害により昭和21年（1946）11月に解散しました。

わきのぼり

④脇登の田の神像

ひやくにちぜき

この田の神は「おねっ（百日咳）の神さあ」として知られており、子どもが百日咳にかかると、火吹竹で頭部を叩きながら回復を願ったと言われています。

【脇登の鶴田川河口から約300メートルほど上流の遡る田畑の畦の上】



こうちせいりとうきねんひ

⑤耕地整理等記念碑

鶴田川周辺の耕地整理や河川改修などを行なった記念碑。

【昭和25年（1950）建設。
鶴田川上流のため池西側】



りんかいあんあと

⑥臨海庵跡

海潟岡集落の山手の墓地内にあり、開山は心翁寺二世丹露和尚と言われる。後方の石仏の総高は2メートル余、台座の裏面に「寛文九天乙酉小西義辰」と刻まれており、僧侶の墓である無縫塔2基が残されています。

（寛文九年は1669年）



ふか みきゆうさくしやうとくひ

⑦ 深見休作頌徳碑

昭和24年（1949）2月垂水漁業協同組合が設立され、初代組合長に就任。戦後の海潟の漁業の近代化に尽力しました。

【昭和33年（1968）9月6日建設。垂水市漁業協同組合入り口付近】



く げいし

⑧ 公卿石

文禄3年（1594）、公家の近衛信輔（後の関白信尹）が後陽成天皇の怒りに触れ、薩摩国坊津へ流される途中、海潟の地に10日間滞在しました。その時に腰かけて弁天島（今の江ノ島）を眺めたと伝えられています。

【松岳寺跡石碑の横、垂水市漁協の南】



さくらじましようぼうとう

⑨ 櫻嶋焼亡塔

安永8年（1779）9月30日桜島が大噴火し、多くの人々が死傷しました。その焼死した人々の霊を、海潟の浜辺で弔いました。約2年後、当時この地にあった松岳寺境内（現在は和光保育園になっています。）にこの碑を建てたものです。垂水島津家の家臣、伊地知季虔が著した「櫻嶋燃記」とともに、噴火災害のありさまを伝える重要な記念碑です。【菅原神社本殿西側】



すが わらじん じゃ

⑩菅原神社

すがわらみち

海瀉飛岡にあり、祭神は菅原道
真。明治41年（1908）9月
28日、川頭神社、巖島神社（江
ノ島にあり、弁天神社とも）、小森
神社を合祀。「垂城伝誌」に伊地知
氏勧請か、とありますが不明。

文禄3年（1594）近衛信輔が坊津へ流される途中、参拝し歌を奉納
したと言われますが、現在は焼失して伝わっていません。



きゆうきょうわしょう ちゅうがっこう あとち

⑪旧協和小、中学校跡地

協和小学校、同中学校は昭和39年（1
964）3月にそれぞれ海瀉飛岡、中俣
松元へ移転しました。

その後、跡地に旧教職員有志により建
設されました。

【平成16年（2004）5月建設。

菅原神社入り口付近】



ごたいてん きねんひ

⑫御大典記念碑

昭和天皇即位を祝して建設されました。
発起人：脇元善○ 堀之内○○長浜盛吉
佐々木三蔵（○は風化して不分明）など
と刻してあります。

【昭和3年（1928）10月10日建
設。菅原神社入り口付近】



⑬田の神像（飛岡）

飛岡川の上流、ため池の西側にあります。背面に「文政九年 奉寄進 二月吉日 海瀉衆中」とありますが、頭部が破損して失われています。従来の田の神とは異なり、神官型です。

（文政九年は1826年）



⑭子安観音

こ やす かんのおん

温泉場の飛岡川左岸の河口近く（現在の海瀉ドライ店の西隣）に観音様が祭られています。

子安観音は安産の神様、また子供たちの健康を守る神様として多くの人々に信仰されています。



⑮耕地災害復旧記念碑

こう ちさいがい ふっきゆうき ねん ひ

平成元年（1989）台風11号災害の際、未被害地区を含めた災害復旧事業の記念碑です。

【中俣川を河口から約200メートルほど上流の耕作地内】



いわ や かん のん
①6 岩屋観音

中俣川の左岸を道なりに浦谷集落うらたにへ向かって行くと、溜め池がありますが、その東方にシラスの崖をくりぬいた洞窟があり、様々な古石塔こせきとうが残っています。

昔の垂水のことを書いた垂城伝誌すいじょうでんしによると、文正8年ぶんしょう(1465)に阿弥陀像あみだぞうを建立した記録もあり、



山伏やまぶしたちが修行したところともいわれています。

いまみや じん じゃ
①7 今宮神社

中俣の上ノ中集落にあり、祭神は経津主神ふ つぬしのかみ。

明治41年(1908)9月28日、是井神社、日枝神社を合祀。隣に中俣地区公民館があります。



なか またうら や しき あとひ
①8 中俣浦屋敷跡碑

藩政時代、浦役屋敷が中俣の園田家の場所にありました。この碑は高さが約60センチ、「元禄八年乙亥八月吉日 ・ ・ 浦役人安藤原左衛門 ・ ・ 」などと記してあります。(元禄八年は1695年)



しょうめんこんごう ぞう

⑱ 青面金剛像

中俣の園田家の場所には藩政時代、浦役屋敷が置かれていました。庭内のこの像は高さ約60センチ、六本の腕を持つ青面金剛とされます。青面金剛は中国の道教思想に由来し、日本の庚申信仰とともに独自に発展した神様です。庚申講の本尊として知られ、三戸の虫を押さえる神と考えられています。



きねんひ

⑳ 記念碑

昭和27年(1952)、中俣瀬角地区の農道内ヶ比良線開通の記念碑。農道の起点に建設してあります。破損したため、平成14年(2002)に台座を再建しました。

【加治屋鉄工の東側】



さいふくじ あと

㉑ 西福寺跡

西福寺は中世に建てられ、中俣瀬角の旧大隅線沿いの山手にあり、現在は地域の墓地となっています。心翁寺の末寺で曹洞宗。開山は心翁寺二世丹露和尚とされています。



②② ^{た かみ ごう}田の神6号

垂水市の指定文化財「田の神像」のうち第6号像。田の神像は、旧薩摩藩内で作られ、豊作を祈願しています。

【是井川河口から上流約200メートルの耕地内】



②③ ^{さい はらきん じ ろう おう の ひ}才原金次郎翁之碑

才原金次郎は農家に対して子牛を預け、成牛に育てて買い取るという肥育牛模合^{もあい}制度を設け、農家の現金収入の道を開きました。

【昭和26年（1951）5月建設。荒崎パーキング北側】



②④ 脇田の地藏

中俣脇田の脇田家にある木造座像の地藏。蓮台を含めた高さ約30センチの仏像で、江戸時代末期に書かれた『三国名勝図会』に「垂水村中俣の脇田にあり。慶長五年関ヶ原乱後、浮田中納言秀家（中略）此の仏を信仰せしという。その後当地へ移せり云々」とあります。（慶長5年は1600年）



ほんじょうがわ ほかるく か せんかいしゅう き ねん ひ

②5 本城川他六河川改修記念碑

大正3年(1914)1月12日、桜島大爆発により大量の噴出物が垂水に降り注ぎ堆積たいせきしました。その後の大雨による河川の氾濫はんらんは、人命はもちろん、田畑や家屋にも大きな被害を与えました。そのため鶴田川、飛岡川、中俣川、是井川(以上は協和地区にある河川)、田上川、市木川、本城川で河川改修が行われました。



【大正5年(1916)建設。鹿児島神社境内】

すえ た あさ いち おう けんしゅう ひ

②6 末田浅一翁顕彰碑

末田浅一【明治27年(1894)、現在の広島県呉市豊町大長生まれ】は昭和初め頃、キヌサヤエンドウおおちょう(当時は大長マメとされていました)を初めて垂水に導入し、普及に努め、垂水がキヌサヤエンドウの一大生産地となる基礎を築きました。



【昭和46年(1971)建設。顕彰碑は本城川 河口の南側・港地区】

【参考資料】

- ・ 垂水市史上・下巻(垂水市編纂)
- ・ 垂水市史料集(三)
- ・ 垂水市史料集(七)その二
- ・ ふるさとの歴史 垂水市協和編(中島 信夫 著)
- ・ 桜島大噴火 よみがえる災害記録(橋村 健一 著)
- ・ 垂水の農業の歴史と今後の農業の方向を探る(大窪 孝 著)
- ・ 記念誌 協和小学校創立百周年(同記念実行委員会)
- ・ 「海瀉温泉再生会」ホームページ
- ・ 広報たるみず
- ・ その他

私たちのふるさと 協和のあゆみ

発行年月 平成28年3月
発行 協和地区公民館
編集 瀬角龍平
〒891-2101
鹿児島県垂水市海潟18番地
☎0994-32-1920
